

19世紀イタリア語名詞句における「省略形」

— 使用形態と統語構造 —

上野 貴史

Ellipsis Forms in Italian Noun Phrases of the 19th Century

Takafumi UENO

In this paper, the use of ellipsis forms in the syntactic structure of Italian noun phrases is analyzed by using two prose works written by Giacomo Leopardi (1798-1837) in the first half of the 19th century. There are obligatory and arbitrary ellipsis in Italian of the time, which is the same as present day. The purpose of this paper is to clarify the use of ellipsis forms from the syntactic structure and the phonetic condition. It will be significant to study Italian use of the century for the linguistic history.

1. 目的

名詞句 (NP) は、主要部である名詞 (N) と幾つかの形容詞などの修飾部によって構成される。名詞句内の修飾部の出現位置は、名詞を前から修飾する前位修飾 (PreM) と、名詞を後ろから修飾する後位修飾 (PostM) に分けられる。類型論的には、イタリア語は、名詞の後位に修飾部をとるとされるが、冠詞や指示形容詞などは、規則的に名詞の前に現れる修飾語である。また、不定形容詞なども前置されるものが少なからず見られる。このようなことから、修飾語が名詞の前後に出現し、それぞれの修飾語に固定した出現位置があることを(1)のように示す。

(1) NP : <PreM1+PreM2+PreM3 ...+N+PostM1
+PostM2+PostM3 ...>

形態的には、(1)で示した名詞句において、一般的な形態 (「基本形」)、語尾切断や省略が行われている形態 (「省略形」)、そして、「基本形」と異なる形態 (「変異形」) が存在する。

本稿では、19世紀前半におけるジャコモ・レオ

パルディ (Giacomo Leopardi : 1798-1837) の散文作品 (以下、LEOと略す) である『道徳小論』 (Operette Morali : 以下、OMと略す) と『思想』 (Pensieri : 以下、Peと略す) をデータとして、名詞句の統語構造における「省略形」の使用を分析するものである。現代イタリア語でも同様であるが、「省略形」の使用には、義務的なものと随意的なものがある。現代イタリア語よりもかなり高い頻度で切断現象が起こるこの時代のイタリア語において、如何なる統語関係で「省略形」が使用されるかを明確にすることが本稿の目的となる。名詞句内における統語構造と使用形態の分析を通して、19世紀におけるイタリア語の言語使用の一端を明らかにしていく。

2. 19世紀イタリア語における名詞句の統語構造

名詞句における修飾語の出現位置には、それぞれの修飾語が共起するか否かにおいて、一定の規則があると考えられる。このような修飾語の統語

位置を考察するため、冠詞・指示形容詞・所有形容詞・数形容詞¹⁾・不定形容詞などが、名詞の前に現れるか、後位に現れるかを調査したものが、<表1>である。

<表1：修飾語の統語位置²⁾>

修飾語の種類	修飾部	PreM	PostM
冠詞		○	×
指示形容詞		○	×
所有形容詞		○	○
数形容詞		○	△
不定形容詞	不定形容詞	○	×
	alcuno「幾つかの」	○	△
	nessuno「どんな～ない」	○	△
	qualsivoglia「どの～でも」	○	△
	tale「ある」	○	△
	veruno「どんな～ない」	○	△

修飾語の統語位置の調査と、それぞれの修飾語の共起関係から、名詞句における修飾語の出現位置を分析すると、<表2>のような統語構造の結果を得ることができる³⁾。

<表2>では、PreM1の tutto から PreM9の品質形容詞までの前位修飾部に続いて、主要部である名詞 N、そして、後位修飾部として PostM1の所有形容詞から PostM4の品質形容詞までによ

て、名詞句が構成されることを示している⁴⁾。この表の中で、同じ修飾部に属するものは、絶対に共起することはない。例えば、定冠詞と指示形容詞は、同じ PreM2に属しているということから、これらが、同一名詞句内で同時に使用されることはない。

3. 名詞句における「省略形」

前節で設定した名詞句の統語構造を元に、ここでは、それぞれの修飾部における「省略形」の出現についての考察を行う⁵⁾。

3.1. PreM1

不定形容詞 tutto は、冠詞類に先行する唯一の語類である⁶⁾。tutto は、<tutto+PreM2+N>の統語構造で出現する場合、例外なく「基本形」で出現する。

(2) *tutta una specie*「ある種類全体」(OM,629:56)⁷⁾

一方、tutto が、後続に不定代名詞や不定形容詞の altro を伴う場合、義務的に「省略形 tutt' が用いられる⁸⁾。この場合、tutt'altro「全然別の」もしくは、tutt'altro che「決して～でない」

<表2：名詞句の統語構造>

統語構造	出現語類
PreM1	tutto「すべての」
PreM2	冠詞類(定冠詞/不定冠詞/指示形容詞)
PreM3	alcuno/ alquanto「多少の」/ altrettanto「同程度の」/ certo「幾らかの」/ ciascheduno「各々の」/ ciascuno「それぞれの」/ diverso「色々な」/ medesimo「同じ」/ molto「多くの」/ nessuno/ niuno/ ogni「どの～も」/ parecchio「かなり多くの」/ poco「少量の」/ quale「～のような」/ qual si sia/ qualche「幾つかの」/ qualsivoglia/ qualunque「どんな～も」/ stesso「同じ」/ tanto「たくさん」/ troppo「過度の」/ vario「色々な」/ veruno
PreM4	数形容詞
PreM5	altro「他の」
PreM6	所有形容詞
PreM7	proprio「～自身」/ stesso「～自身」
PreM8	così fatto/ cotale「かかる」/ si fatto/ tale「とある」
PreM9	品質形容詞
N	名詞
PostM1	所有形容詞
PostM2	proprio/ stesso「～自身」
PostM3	alcuno/ così fatto/ nessuno/ qualsivoglia/ tale/ veruno
PostM4	品質形容詞

という意味の慣用表現として使用される。

- (3) sono *tutt'altro* che ridicole
 「決して滑稽なことではない」(OM,791:59-60)

3.2. PreM2とPreM3

PreM2とPreM3に出現する語類は、それぞれ、冠詞類と不定形容詞である。ここでは、「基本形」の形態により、三つに分けて考察を行う。

3.2.1. 定冠詞・冠詞前置詞・指示形容詞 (quello)

まず、ここでは、定冠詞活用を行う定冠詞、冠詞前置詞、それと指示形容詞 *quello* について、分析を進める。分析に当たっては、便宜上、語幹部分を X で示すことにする。

3.2.1.1. 男性複数 X-gli/ X-gl'

男性複数形態の「基本形」X-gli は、後続の名詞などが母音 (V), z-, 不純のs (*s impura*⁹⁾) などで始まる場合に使用される。現代イタリア語では、その「省略形」X-gl' は、ほとんど使用されないことがないが¹⁰⁾、LEO においては、<表3>のように後続母音が/i/である場合、ほぼ義務的に「省略形」X-gl' が使用されている。

- (4) *quegl'impedimenti* 「あの支障」(OM,724:16)

<表3：母音が後続する場合のX-gliとX-gl'の分布>

後続母音	形態	X-gli	X-gl'	計
/a/		350例(100%)	-	349例
/e/		41例(100%)	-	41例
/i/		2例(3.0%)	65例(97.0%)	67例
/o/		47例(100%)	-	47例
/u/		424例(100%)	-	424例

後続音が/i/である場合に「基本形」X-gliが使用されているのは、(5)で示した2例のみであるが、「省略形」との意味的・統語的な差異は見られない。

- (5) *gli immortali* 「神々」(OM,601:513)
 il sospetto *degli* incendi 「大火灾の心配」(OM,709:70)

頻度的に、<X-gl'i->という連続は、義務的なものと見なすことが出来るが、現代イタリア語ではほとんど「省略形」が用いられないことを考えると、僅かに見られる「基本形」の例は、「省略形」を

用いない方向への揺れと見なすことができよう。

3.2.1.2. 男性複数X-i/ X-'

s impura などを除く子音で始まる男性複数名詞などが後続する場合、現代イタリア語では、X-iの「省略形」X-'が使用されることはないが、LEOにおいては、冠詞前置詞と*quello*において、その使用が見られる。

<表4：X-iとX-'の分布>

前置詞など	形態	X-i	X-'	計
a	ai	136例(88.9%)	a' 16例(11.1%)	152例
da	dai	47例(75.8%)	da' 15例(24.2%)	62例
di	dei	236例(71.7%)	de' 92例(28.3%)	328例
in	nei	62例(79.5%)	ne' 16例(20.5%)	78例
con	coi	28例(75.7%)	co' 9例(24.3%)	37例
tra	tra i	5例(83.3%)	tra ¹¹⁾ 1例(16.7%)	6例
quello	quei	45例(95.7%)	que' 2例(4.3%)	47例

いずれの場合においても、「基本形」X-iの形態が優位を保っているが、現代イタリア語では見られない「省略形」の使用が若干見られる。

- (6) *di riparare a' suoi danni*
 「彼の不利益を償うこと」(OM,619:58)
co' suoi libri 「自分の本を持って」(OM,813:2)

「省略形」は、(6)で挙げた例のように、名詞句内に所有形容詞や所有代名詞を含む統語構造に特徴的に見られる。この中でも、単数人称の*miei/ tuoi/ suoi*が所有形容詞として名詞に前置される場合、即ち、<X-' + *miei/ tuoi/ suoi* + N>の統語構造では、例外なく「省略形」が使用されている(<表5>)。

3.2.1.3. 女性単数 X-la/ X-l'

後続する名詞類が女性単数である場合、現代イタリア語では、義務的にX-l'という「省略形」が使用される¹²⁾。LEOにおいても、この場合、「省略形」の使用が優位であるが、「基本形」X-laの使用が、後続母音全体で9.5%の割合で見られる。この中で、後続母音が/a/である場合に限り、「省略形」の使用が義務的となっている。

- (7) *l'allegria* 「愉快さ」(Pe,1138:34-7)¹³⁾

<表5: X-'と所有形容詞・所有代名詞>

X-' \ 所有形容詞・代名詞	+miei	+tuoi	+suoi	+nostri	+vostri	+loro	+altrui	その他
a'	1例	3例	7例	-	-	-	-	5例
da'	2例	2例	3例	-	-	1例	-	7例
de'	2例	8例	12例	3例	1例	3例	1例	70例
ne'	2例	1例	4例	-	-	-	-	9例
co'	-	-	4例	-	-	3例	-	2例
que'	-	1例	1例	-	-	-	-	-

<表6: 母音が後続する場合の X-la と X-l' の分布>

後続母音 \ 形態	X-la	X-l'	計
/a/	-	154例(100%)	154例
/e/	10例(10.5%)	85例(89.5%)	95例
/i/	25例(15.7%)	134例(84.3%)	159例
/o/	5例(11.1%)	40例(88.9%)	45例
/u/	6例(17.7%)	28例(82.3%)	34例

その他の母音の場合、切断は任意ではあるが、X-l' の優位性は保たれている。また、このような切断の有無による意味上の差異は見られない。

- (8) *la esperienza e la cognizione* 「経験と知識」(OM,787:114)
- (9) *l'esperienza e la cognizione* 「経験と知識」(OM,788:131)

3.2.1.4. 女性複数 X-le/ X-l'

後続する名詞類が女性複数である場合、現代イタリア語においては、義務的に「基本形」X-le が用いられる。LEO においては、不定代名詞・不定形容詞の *altre* と、不定代名詞 *une* が後続する場合に限り、「省略形」が出現する。*altre* が不定代名詞として現れる場合と不定形容詞 (*altre*+N) として現れる場合の「基本形」と「省略形」の頻度は、<表7>のようになる。

<表7: 不定代名詞・不定形容詞 *altre* が後続する場合の X-le と X-l' の分布>

構造 \ 形態	X-le	X-l'	計
<i>altre</i> N	78例(94.0%)	5例(6.0%)	83例
<i>altre</i>	16例(66.7%)	8例(33.3%)	24例

<表7>における「省略形」X-l' は、すべて定冠詞に起こる。

- (10) *l'altre cose* 「別のこと」(OM,630:90)

不定代名詞として *altre* が用いられる場合は、複数女性定冠詞が X-l' としてかなりの部分許容されている

- (11) *tutte l'altre* 「他のものすべて」(Pe,1144:42)
- (12) *tutte le altre* 「他のものすべて」(OP,643:58)

不定代名詞 *une* が後続する場合においても、X-le と X-l' の例がそれぞれ1例ずつ見られる。

- (13) *le cause e gli effetti dell'une e degli altri*
「互いの原因と結果」(OM,743:59)
- (14) *il modo di superare le une e di conseguire le altre*
「一方を凌ぎ他方を獲得する方法」(OM,726:81)

このように、不定代名詞として用いられる *altre* と *une* は、かなりの部分、「省略形」の使用を許す。

3.2.2. 不定冠詞・不定形容詞

ここでは、不定冠詞と不定冠詞活用を行う *alcuno/ ciascheduno/ ciascuno/ nessuno/ niuno/ veruno* という不定形容詞について扱う。不定形容詞は、何れも *uno* の複合語であることから、これらを X-uno として取り扱うことにする。

3.2.2.1. 男性形 X-un/ X-uno

後続する名詞類が母音で始まる男性単数形である場合、現代イタリア語においては、「省略形」X-un が使用されるのが一般的である。LEO においては、このような場合、「基本形」X-uno が用いられているものが見られる。

もちろん、後続音が母音の場合における X-un の使用の優位には変わりないのであるが、/a/, /i/, /u/ が後続する場合に X-un と X-uno に若

<表 8：母音が後続する場合の X-uno と X-un の分布>

後続母音	形態	X-uno	X-un	計
/a/		6例(7.8%)	71例(92.2%)	77例
/e/		-	15例(100%)	15例
/i/		6例(33.3%)	12例(66.7%)	18例
/o/		-	6例(100%)	6例
/u/		2例(20.0%)	18例(90.0%)	20例

干の揺れが見られる。

(15) *un imperatore dell'universo* 「全世界の皇帝」
(OM,866:58)

(16) *a figura di uno anello*

「一つのリングの形に」(OM,837:114)

後続が子音(C)で始まる名詞類である場合に関して、現代語では、「省略形」が用いられるところに「基本形」が使用されているものとして(17)のような例がある。

(17) *niuno rimedio* 「如何なる救済もない」
(OM,594:348)

また、逆に現代語では、「基本形」が使われるところでの「省略形」の使用として(18)がある。

(18) *un zitto* 「ささやき」(OM,615:114)

3.2.2.2. 女性形 X-una/ X-un'

女性形に関しては、母音が後続する場合に「省略形」X-un'ではなく「基本形」X-unaが使用されるものが見られる。

<表 9：母音が後続する場合の X-una と X-un' の分布>

後続母音	形態	X-una	X-un'	計
/a/		4例(11.4%)	31例(88.6%)	35例
/e/		3例(42.9%)	4例(57.1%)	7例
/i/		5例(45.5%)	6例(54.5%)	11例
/o/		1例(6.7%)	14例(93.3%)	15例
/u/		1例(100%)	-	1例

後続音が/e/と/i/で始まる場合、高い頻度でX-unaの使用が認められる。

(19) *una eziandio menoma quantità*

「やはり同様に最小の量」(OM,834:29)

(20) *una immagine proporzionata*

「妥当なイメージ」(OM,820:207)

X-uno は、男性形態・女性形態ともに、現代

語で「省略形」を用いるところで、LEOでは、「基本形」の使用が見られる。このような「基本形」の使用には、次のような音韻的特徴を指摘することができる。①同じ音韻の連続をさける。つまり、<X-uno o->や<X-una a->の連続は、ほとんど見られない。②強母音と弱母音¹⁴⁾の組み合わせが高頻度である。即ち、<X-uno i-/u->と<X-una i-/u->という連続が多く見られる。これは、イタリア語の二重母音の組み合わせと一致する現象である。

3.2.3. 指示形容詞 (questo)・不定形容詞 (ogni)

指示形容詞 *questo* は、母音で始まる単数名詞の前では、「省略形」*quest'*が使用されることがある¹⁵⁾。この「省略形」の使用は、現代イタリア語においては、随意的なものとしてされる¹⁶⁾。LEOにおいても、母音で始まる単数名詞の前で両方の形態の使用が見られる(<表10>)。<表10>から、男性・女性形態とも「基本形」の使用が優位であることが分かる。「省略形」の使用は、後続に同じ音韻が連続する場合に高い頻度で出現している。

(21) *quest'assuefazione* 「この順応性」

(OM,700:213-4)

不定形容詞 *ogni* は、後続が*i*で始まる名詞類の場合、「省略形」*ogn'*が用いられることがある。

(22) *ogn'intorno* 「至る所」(OM,667:98)

このような「省略形」の使用が3例見られたのに対して、「基本形」でも2例使用されている。

(23) *ogni immaginazione piacevole*

「あらゆる心地よい想像」(OM,911:318-9)

3.3. PreM4・PreM5・PreM6

PreM4の数形容詞(Nu)の「省略形」は、後続する名詞が*anno*である場合に出現する。

(24) *quarant'anni* 「40歳」(Pe,1181:108-4)

この数形容詞の語末音と「省略形」の使用に関して調査したものが<表11>である。

表から、数形容詞の語末音韻が/a/である場合、「省略形」の使用が多く見られることが分かる。これは、後続名詞*anno*の語頭音/a/との衝突を避けるためであると考えられる。

<表10：母音が後続する場合の questo/aとquest' の分布>

後続母音	男性形		女性形	
	questo	quest'	questa	quest'
/a/	9例(75.0%)	3例(25.0%)	2例(28.6%)	5例(71.4%)
/e/	11例(78.6%)	3例(21.4%)	3例(100%)	-
/i/	2例(100%)	-	9例(90.0%)	1例(10.0%)
/o/	-	1例(100%)	1例(100%)	-
/u/	1例(20.0%)	4例(80.0%)	1例(50.0%)	1例(50.0%)
母音全体	23例(67.6%)	11例(32.4%)	16例(69.6%)	7例(30.4%)

<表11：<Nu+anno>の「基本形」と「省略形」の分布>

語末音	「基本形」	「省略形」
/a/	2例(20.0%)	8例(80.0%)
/e/	4例(100%)	-
/i/	1例(50.0%)	1例(50.0%)
/o/	2例(100%)	-

PreM5の統語位置に出現する altro は、all' altr' ieri「一昨日に」(OM,904:82) という句に1例が「省略形」で用いられている。altroの後続に母音が登場する場合に「省略形」が使用されていないことを考えると、「省略形」altr'の使用は、慣用表現に用いられるものと考えられる。

PreM6の所有形容詞は、三人称複数 loro に「省略形」lor が使用されている。

⑤ i lor fiumi「彼らの川」(OM,867:105)

このような「省略形」が使われる場合、その後続音韻は、すべて子音となっている。「基本形」と「省略形」の分布は、「基本形」loro が260例に対し、「省略形」lor が4例と圧倒的に「基本形」の使用が優位である。

3.4. PreM8

PreM8では、tale とその複合語 cotale の単数形態において、「省略形」が用いられることがある。同じような使用分布を行うものに PreM3の関係形容詞・疑問形容詞の quale があるので、ここでは quale を含めたものを X-ale¹⁷⁾として考察を行う。これらの語は、現代語においては、主に後続が母音である場合に「省略形」が用いられるが、LEOにおいては、後続が母音である場合は、「基本形」、子音である場合は、「省略形」が多

されている。

⑥ il qual desiderio e amore

「そのような欲望と愛情」(OM,886:372)

colla quale intenzione

「そのような目論見で」(OM,615:136-7)

<表12：X-ale と X-al の分布>

後続音	X-ale	X-al	計
+V	28例(90.3%)	3例(9.7%)	31例
+C	24例(20.3%)	94例(79.7%)	118例

<X-al+V>となる3例は、何れも<X-al altra>という連続の場合に見られ、主要部が不定代名詞 altro の場合に限られている。

⑦ dubitar di tale o di tal altra

「あのことやまた別のことを疑う」

(OM,742:50)

子音が後続する場合の「基本形」・「省略形」の分布を考察するために、後続音韻を調査したものが<表13>である。<表13>から、後続音韻と「基本形」・「省略形」に関して次のような指摘が可能であると思われる。①閉鎖音 (/p/, /t/, /k/, /b/, /d/, /g/) が後続する場合、「省略形」が優勢である。特に無声閉鎖音 (/p/, /t/, /k/) の場合、かなりの頻度で「省略形」が用いられる。②/s/が後続する場合、/s/+Vであれば「省略形」、s impuraであれば「基本形」が優勢である。③鼻音 (/m/, /n/) が後続する場合、「省略形」が優勢である。

3.5. PreM9

PreM9に属する品質形容詞は、単数形態において、「省略形」が用いられるものがある。LEOでは、bello「美しい」/ buono「良い」/ grande

<表13：子音が後続する場合のX-aleとX-alの分布>

後続子音 \ 形態	X-ale	X-al	計
/p/	1例(7.7%)	12例(92.3%)	13例
/t/	2例(25.0%)	6例(75.0%)	8例
/k/	2例(6.1%)	31例(93.9%)	33例
/b/	1例(33.3%)	2例(66.7%)	3例
/d/	3例(27.3%)	8例(72.7%)	11例
/g/	-	3例(100%)	3例
/tʃ/	1例(100%)	-	1例
/dʒ/	-	4例(100%)	4例
/s/+V	2例(18.2%)	9例(81.8%)	11例
/s/+C	6例(100%)	-	6例
/f/	1例(33.3%)	2例(66.7%)	3例
/v/	-	2例(100%)	2例
/l/	1例(50.0%)	1例(50.0%)	2例
/r/	2例(100%)	-	2例
/m/	1例(7.7%)	12例(92.3%)	13例
/n/	2例(25.0%)	6例(75.0%)	8例

「大きい」/ maggiore 「より大きい」/ malo 「悪い」/ mezzo 「半分の」/ migliore 「より良い」/ minore 「より小さい」/ peggiore 「より悪い」などに見られる。ここでは、男性単数形態が-oで終わるものと、-eで終わるものに分けて考察を行う。

3.5.1. -o

buono は、現代イタリア語では、s impura を除く男性単数名詞の前で「省略形」buon が用いられる。LEOでも、s impura が後続する場合、「基本形」buono、それ以外の子音では「省略形」buon が使用されている¹⁸⁾。ただし、母音が後続する場合は、㉔のように、両方の形態が見られる¹⁹⁾。

㉔ questo *buono* effetto 「この良い効果」(OM,879:141)

buon animo 「良い精神」(OM,692:5)

女性形態では、ora が後続する場合において「省略形」buon' が使用されている (*buon'ora* 「良い時」(OM,614:80))。これと同じことが、mezzo にも見られる (*mezz'ora* 「半時間」(OM,845:66))。

bello の「省略形」bel は、定冠詞と同様、s impura を除く子音が後続する場合、そして「省略形」bell' は、母音が後続する場合に規則的に用いられている。これは、現代語と同じ使用分布

となっている。

㉔ *il bel* sogno 「良い夢」(OM,700:230-1)

a bell'agio 「くつろいで」(OM,793:26)

malo は、後続が男性単数名詞の場合、義務的に「省略形」mal が使用されている²⁰⁾。

㉔ *la causa del mal* animo 「悪感情の原因」(OM,845:79)

3.5.2. -e

男性単数形態が -e で終わる grande/ maggiore/ migliore/ minore/ peggiore は、多くの場合、母音やs impura が後続するとき「基本形」、子音が後続するときは「省略形」が用いられる。

㉔ *nella maggior* parte

「大部分の場合において」(OM,886:355)

la maggiore utilità 「より多くの有用性」(Pe,1149:51-5~6)

しかしながら、s impura 以外の子音が後続する場合に、「基本形」を使用しているものが僅かであるが見られる。<表14>から、後続音韻と「基本形」・「省略形」に関して次のような指摘が可能であると思われる。①閉鎖音 (/p/, /t/, /k/, /b/, /d/) が後続する場合、「省略形」が優勢である。②/s/が後続する場合、/s/+V であれば「省略形」、s impura であれば「基本形」が用い

<表14：-eにおける「基本形」と「省略形」の分布>

後続子音 \ 形態	「基本形」	「省略形」	計
/p/	1例(2.0%)	49例(98.0%)	50例
/t/	1例(8.3%)	11例(91.7%)	12例
/k/	1例(4.2%)	23例(95.8%)	24例
/b/	-	5例(100%)	5例
/d/	-	11例(100%)	11例
/g/	1例(100%)	-	1例
/tʃ/	1例(100%)	-	1例
/s/+V	-	12例(100%)	12例
/s/+C	9例(100%)	-	9例
/f/	-	7例(100%)	7例
/v/	2例(50.0%)	2例(50.0%)	4例
/l/	-	13例(100%)	13例
/r/	-	3例(100%)	3例
/m/	-	13例(100%)	13例
/n/	2例(7.7%)	11例(92.3%)	13例

られる。③鼻音 (/m/, /n/) が後続する場合、「省略形」が優勢である。④流音 (/l/, /r/) が後続する場合、「省略形」が用いられる。子音が後続する場合における「基本形」の使用は、後続が女性名詞の場合や後続名詞が二重子音である場合に特徴的に見られる。

③2 *minore vitalità e sentimento*

「少ない生命力と感覚」(OM,646:139)

grande tristezza 「大きな悲しみ」

(OM,816:99)

ここでは、音節切断が行われる *grande* に関して、詳細な分析を試みることにする。古浦(2000)では、13世紀の韻文『小宝庫』(Tesoretto)と散文『古譚百種』(Le cento novelle antiche)をデータとして、*grande* のトロンカメント²¹⁾に関する考察を行っている。そして、①後続語の語頭音が母音の場合は、語尾切断を起こさないのが原則であること、②後続語の語頭音が *s impura* などの子音の場合は、現代イタリア語同様、語尾切断が起こらないこと、③韻文の『小宝庫』のほうが散文の『古譚百種』よりも語尾切断の出現率が高いこと、④後続語名詞の性・数と語尾切断との関係は特にないこと、を指摘している。本稿では、「省略形」と後続音韻との関係を分析するため、古浦(2000)で収集された散

文『古譚百種』のデータ、14世紀の Giovanni Boccaccio (1313-1375) の『デカメロン』(Decameron)²²⁾(以下、Deと略す)、LEO、そして現代語である IC におけるデータを比較してみる。*s impura* は、全時代を通じて「基本形」が用いられていることから、*s impura* を除いた子音が後続する場合の「省略形」の使用率を調べてみると、それぞれ、55.3% (13世紀)、100% (14世紀)、98.8% (19世紀)、60.0% (現代)となる。13世紀の時代において「基本形」と「省略形」の使用に揺れがみられたものが、14世紀と19世紀においては、ほぼ「省略形」の使用が義務的となっていることが分かる。現代においては、古い時代と同様、かなりの揺れがみられる。また、13世紀と14世紀においては、後続が複数名詞の場合においても「省略形」の使用がみられる²³⁾。

③3 *i gran bevitori* 「大酒飲み」(De,36:2)

このような後続に複数名詞を従える場合の「省略形」の使用は、19世紀以降は、完全に消失している²⁴⁾。

3.6. N

主要部である名詞の「省略形」は、*amore* 「愛」や *valore* 「価値」などの単数形態にみられる。「省略形」の起こる名詞は、語末が *-e* で終わるも

<表15 : *grande* の後続子音の分布>

形態 後続子音	13世紀		14世紀		19世紀		20世紀	
	<i>grande</i>	<i>gran</i>	<i>grande</i>	<i>gran</i>	<i>grande</i>	<i>gran</i>	<i>grande</i>	<i>gran</i>
/p/	5例	13例	-	21例	-	18例	-	1例
/t/	2例	7例	-	4例	1例	9例	-	1例
/k/	6例	6例	-	7例	-	9例	-	-
/b/	3例	4例	-	6例	-	2例	-	-
/d/	2例	-	-	9例	-	7例	-	1例
/tʃ/	-	-	-	-	-	-	1例	1例
/dʒ/	-	1例	-	3例	-	-	1例	1例
/s/+V	7例	3例	-	7例	-	3例	-	3例
/s/+C	4例	-	6例	-	5例	-	-	-
/f/	3例	9例	-	9例	-	7例	-	-
/v/	3例	1例	-	15例	-	1例	-	-
/l/	4例	2例	-	4例	-	12例	-	-
/r/	3例	1例	-	2例	-	3例	1例	-
/m/	2例	5例	-	10例	-	7例	3例	1例
/n/	2例	0例	-	-	-	1例	-	-

ので、その一つ前の音韻が/l/, /r/, /n/のものに限定されている。すなわち、語末が-re (cancellier 「書記官」), -le (mal 「悪」), -ne (mutazion 「変化」) で終わる単数名詞にのみ「省略形」が現れる。統語的には、(34)のように、後位修飾語をとり、その修飾語が子音で始まる場合と、(35)のように、後続に di で始まる前置詞句をとる場合に「省略形」が使用される。

(34) un *amor grande* 「大きな愛」(Pe,1166:82-18)

(35) la *disposizion del corpo* 「体質」(OM,889:471)

4. 「省略形」の要因

「省略形」は、基本的に音韻的な要因から使用されるものである。しかしながら、前節までで分析したように、音韻以外の統語的な要因からも「省略形」の使用が行われるものが見られる。このことから、音韻的なものを一次的、そして統語的なものを二次的な要因として、「省略形」の考察を加えていくことにする。一次的な音韻的要因は、切断音、切断音の直前音²⁵⁾、後続音韻が大きく関与している。LEOに見られる「省略形」の使用を分析してみると、後続音韻が母音である場合と、子音である場合の使用とに分類可能である。

4.1. 母音

後続音韻が母音である場合に、「省略形」が使用されるものには、すべての母音が後続する場合に「省略形」が使用されるものと(36)、特定の母音で「省略形」が現れるもの(37)がある²⁶⁾。

(36) <X-l' V->/ <X-un V->/ <X-un' V->/

<quest' V->

(37a) <X-gl' i->/ <ogn' i->

b) <X-l' a/u/> <X-al a->/ <Nu' a->/

<altr' i->/ <buon' o->/ <mezz' o->/

<tutt' a->

すべての後続母音に「省略形」が見られる(36)における「省略形」の使用率は、<X-l' V->が90.6%、<X-un V->が89.7%、<X-un' V->が79.7%、<quest' V->が31.6%となっている。この中でも切断音と後続の語頭音が同一の場合の「省略形」の使用率は、<X-l' a->が100%、<X-un o->が100%、<X-un' a->が88.6%、<quest' o->が100%、

<quest' a->が71.4%と非常に高くなっている。これは、同音の衝突を避けるという音韻的要因が働いているためであると考えられる。(37)で示したものは、特定の後続母音で「省略形」が使用されるものであるが、音韻的要因だけによるもの((37a))と、音韻的要因に統語的要因が加わっていると考えられるもの((37b))に分けることができる。(37a)の<X-gl' i->と<ogn' i->は、切断音であるiと同じ後続音が連続する場合に「省略形」が使用されているものであり、この使用率は、<X-gl' i->が97.0%、<ogn' i->が60.0%となっている。一方、(37b)で示したものは、後続が母音で始まるという音韻的要因に加えて、統語的な要因が「省略形」の使用に関係しているものである。tutt' は、<tutt' N>という統語構造を持ち、なおかつ主要部に altro が出現する場合に「省略形」が使用される。同様に、後続に altro が現れる場合に「省略形」が使用されるものは、<X-l' altre>や<X-al altra>に見られる。また、特定の名詞が主要部に現れる場合に「省略形」が使用されるものとして、<Nu' anni>、<altr' ieri>、<buon' ora>、<mezz' ora>がある。これらには、ある程度慣用的に使用されるものが含まれている。

4.2. 子音

s impura を除く子音で始まる語彙が後続する場合に「省略形」が用いられるものには、母音と同様、音韻的要因により出現するもの(38)と、音韻的要因に加えて統語的要因により出現するもの(39)がある。

(38) <X-al C->/ <bel C->/ <buon C->/

<gran C->/ <maggior C->/

<miglior C->/ <minor C->/ <peggior C->/

<lor C->

(39) <X- C->/ <N C->

(38)で示した音韻的要因によるものの「省略形」出現率を示すと<表16>のようになる。

音韻的要因による「省略形」は、<lor C->を除いて、かなりの高い出現率を示していることから、これらは、ほとんど義務的に使用されていると考えられる。その中でも3.4.や3.5.2.で分析した

<表16：「省略形」の出現率>

構造	出現率
bel C-	100%
buon C-	100%
miglior C-	100%
peggior C-	100%
gran C-	98.8%
maggior C-	92.3%
X-al C-	83.8%
minor C-	70.0%
lor C-	1.5%

ように、閉鎖音・鼻音・流音が後続する場合においては、「省略形」の使用が特に優位である。(39)で示したものは、音韻的要因に加えて統語的要因により「省略形」が使用されているものである。<X' C->は、<X'+所有形容詞・所有代名詞+(N)>という統語構造で頻繁に用いられるものであり、<N C->は、<N+形容詞>もしくは<N+di>といった統語構造において「省略形」が使用される。このようなことから、音韻的現象である語尾切断に、統語的な要因が深く関与しているものがあること

が指摘できると思われる²⁷⁾。

5. 結語

以上、LEOにおける「省略形」の使用を分析することにより、切断現象が音韻条件と統語条件の両面から出現することを考察してきた。しかしながら、このような切断現象は、現代イタリア語においては、衰退の方向性に進んでいるとされる。このような中、19世紀前半においては、完全に義務的なものと随意的なものにかなりの頻度的差異が見られるものの、「省略形」と「基本形」との間にかかなりの揺れが見られる。このような揺れの多くが現代語では、固定化の方向に進んでいるのであるが、その途上の時代のデータを分析により、切断現象の一端を明らかにできたのではないかと思う。今後は、名詞句内に見られる諸現象の考察を進めながら、イタリア語史における19世紀の位置づけを明確にしていきたい。

略語

N：名詞/ NP：名詞句/ PreM：前位修飾部/ PostM：後位修飾部/ Nu：数形容詞

X：語幹/ C：子音/ V：母音

LEO：レオバルディの作品/ OM：『道徳小論』/ Pe：『思想』/ IC：『宿命の交わる城』/ De：『デカメロン』

引用文献

Opere di Giacomo Leopardi (1977) Unione Tipografico-Editrice Torinese.

Il castello dei destini incrociati (1973) Einaudi.

Decameron (1975) Unione Tipografico-Editrice Torinese.

注

- 1) 数形容詞には、基数形容詞・序数形容詞・倍数形容詞などがある。本稿では、特定の統語位置をとる基数形容詞だけを対象として扱う。
- 2) <表1>における○の記号は出現するもの、×は出現しないもの、△はわずかであるが出現を許すものを示す。この中で、冠詞と指示形容詞は、例外なく前位修飾に現れる。所有形容詞は、頻度的には前位修飾の方が優勢であるが、後位修飾もかなりの頻度で見られる（前位修飾1000例、後位修飾218例）。数形容詞は、原則、前位修飾である。しかしながら、l'anno ottocento trentatremila dugento settantacinque「833275年」(OM,663:1)のように、基数形容詞が序数詞的な機能をする場合に限り、後位修飾の例が見られる。不定形容詞は、基本的に前位修飾である。後位修飾を許す不定形容詞としては、alcuno/ nessuno/ qualsivoglia/ tale/ verunoが見られる。後位修飾を許す不定形容詞は、後位修飾部に現れた場合、前位修飾とは異なった意味を示す。alcuno/ nessuno/ tale/ verunoは、後位修飾されると、強調表現となり、qualsivogliaは、後位修飾されると、軽蔑的なニュアンスが示される。
- 3) 統語構造の設定に関しては、拙稿（2002）を参照のこと。
- 4) 表で示した名詞句の統語構造だけを見ると、さも一つの名詞句に多くの修飾語が連続するよう見えるが、実際には、一つの名詞句には、修飾語は多くて4つ程度までしか出現しない。また、PreM1の tutto と PreM3の不定形容詞が、同時に出現したり、PreM3の不定形容詞の多くが PreM2の冠詞類と共起することはない。この理由としては、統語的というよりも意味的な制限の存在が考えられるが、ここで示した統語構造は、単に線状的に統語位置だけを示すに留めておく。つまり、実際の名詞句では、ほとんどの修飾部は、空になっているということになる。ただし、これらが出現する場合、<表2>のような順序で名詞句が構成されることになる。
- 5) 結果的には、「省略形」は、前位修飾部と主要部である名詞にしか起こらない。
- 6) 冠詞類に先行する語類は、tuttoの他、ambidue「両方の」/ entrambi「両方の」/ ambo「両方の」といった集合的意味を表す数詞があるが、LEOには、これらの使用が全く見られない。ambidueは、cose *ambidue* false e fantastiche「間違った想像上の二つのこと」(OM,696:117)のように、後置された例が1例見られるだけである。
- 7) (OM,629:56)は、作品名(OM)、ページ数(629)、行数(56)を示す。
- 8) 「省略形」tutt'の使用は、5例見られる。
- 9) s impuraとは、<s+子音字>の形を指す。
- 10) イタロ・カルヴィーノ(Italo Calvino)のIl castello dei destini incrociati『宿命の交わる城』(1973)(以下、ICと略す)の中にも「省略形」X-gl'は、全く見られない。
- 11) 前置詞 traは、定冠詞が後続する場合、一般的には、冠詞前置詞の形態を持たないが、LEOでは、「省略形」の場合に1例だけtra'という形態が見られる。
- 12) しかしながら、現代イタリア語においても、書き言葉、特にジャーナリズムの文章では、「基本形」の使用が認められる。Brunet(1979)には、urgenzaに前置する定冠詞が、64例中19例がla urgenzaであるという報告がある。
- 13) (Pe,1138:34-7)は、作品名(Pe)、ページ数(1138)、章(34)、行数(7)を示す。
- 14) 強母音は、a/ e/ o、弱母音は、i/ uを指す。
- 15) もう一つの指示形容詞 cotestoは、すべて「基本形」が使用されている。cotesta azione「その行動」(OM,886:380)。
- 16) ICにおいては、「基本形」questo/aが6例に対して、「省略形」quest'が5例見られた。
- 17) ここで示したXは、語幹ではないが、便宜上この記号を使用する。
- 18) <buono+C>が、13例、<buono+s impura>が4例見られる。
- 19) これらは、それぞれ2例ずつ使用されている。
- 20) この他、santo「聖〜」も子音が後続する場合に、「省略形」sanが使用される(san Tommaso di Aquino「聖トーマスディアクィーノ」(OM,620:81))。
- 21) 本稿では、このようなトロンカメントの起こる形態を「省略形」と呼んでいる。
- 22) データとしては、第一日目と第二日目を扱った。
- 23) 複数名詞の前での「省略形」の使用は、『古譚百種』が2例、『デカメロン』が7例となっている。

- 24) この他にも, particolare 「特殊な」が名詞に前置する場合, una *particolare* compagnia 「ある特別な仲間」(Pe,1 172:93-3)のように, 「省略形」が使用されている。
- 25) 切断音と切断の直前音に関しては, 拙稿(1993a)を参照のこと。
- 26) <bell'a->は, 用例数が少ないため分析対象とはしなかった。
- 27) この他, 後続する名詞の統語素性により, 「省略形」が使用されるものとして malo があると思われる。malo は, 母音と子音の両方の音韻環境において, 「省略形」が使用される。この「省略形」の使用には, 主要部に男性単数という統語素性が出現する場合に, 「省略形」が使用される。従って alcuna *mala* azione 「幾つかの悪い行い」(OM,880:155)のように, 主要部に女性単数が現れる場合には, 「基本形」が使用されている。

参考文献

- Brunet, Jacqueline B. 1979. *Grammaire critique de l'italien*, 2 (*L'article*). Universite de Paris VIII - Vincennes.
- Dardano, Maurizio & Pietro Trifone. 1985. *La lingua italiana*. Zanichelli.
- De Mauro, Tullio. 2001. *Storia linguistica dell'Italia unita 7 ed.* Editori Laterza.
- Fogarasi Miklós. 1983. *Grammatica italiana del novecento 2ed.* Bulzoni Editore.
- . 1990. *Nuovo manuale di storia della lingua italiana*. Le Monnier.
- Lepschy, Anna Laura & Giulio Lepschy. 1988. *The Italian Language Today 2 ed.* New Amsterdam.
- Maiden, Martin. 1995. *A Linguistic History of Italian*. Longman.
- Marazzini, Claudio. 1994. *La lingua italiana: Profilo storico*. il Mulino.
- Migliorini, Bruno. 2000. *Storia della lingua italiana 8ed.* Bompiani.
- Renzi, Lorenzo. 1991. *Grande grammatica italiana di consultazione Volume 1: La frase. I sintagmi nominale e preposizionale 3ed.* il Mulino.
- Sensini, Marcello. 1997. *La grammatica della lingua italiana*. Oscar Mondadori.
- Serianni, Luca. 1989. *Grammatica italiana: Italiano comune e lingua letteraria*. UTET.
- 古浦敏生. 2000. 「十三世紀イタリア語文法研究:『小宝庫』と『古譚百種』を資料として」. 広島大学文学部紀要 第60巻特輯号4.
- 上野貴史. 1992. 「イタリア語の語尾切断現象(1): 動詞の語尾切断」. 大阪女子短期大学紀要 第17号. pp.79-87.
- . 1993a. 「イタリア語の語尾切断現象(2): 名詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞の語尾切断」. 大阪女子短期大学紀要 第18号. pp.51-59.
- . 1993b. 「イタリア語における切断現象と使用頻度」. NIDABA (西日本言語学会編) 第22号. pp.103-111.
- . 2002. 「19世紀イタリア語における名詞句の統語構造」. 『言語論集』. 溪水社.